兵役

山野米蔵

戦前は成人式なんて無かった。それに代わる徴兵制度があり、男子たるものは必ず受験して合格の可否を決めたものだ。そして甲種、乙種は、皆兵役についた。

私は、視力弱く丙種であったが、昭和二十年三月に召集され、和歌山中部第二十四部隊に入隊。五月に新部隊編成となり、二回目に選ばれ、橘隊に入り、千葉、茨城両県の各地を転々とした。後で聞いた話だが、一回目、三回目に選ばれた人は、外地に回され、その途中で撃沈されたとのこと。

ある日、伝令で用務についた時、池のそばあたりで機銃掃射の音が聞こえてきた。神経を使いながら歩いていた。ふと池の近くまで来るとB29が下降しながらバンバンと湖水目掛けて掃射している。瞬間、思わず伏せて様子を見た。小さな舟に乗っている若夫婦目掛けての発射だ。B29が飛び去り、池のふちまで来ると、夫は鮮血にまみれて顔面血だらけ、妻は幸いケガが少なかったのか「兵隊さん、助けて下さい」と哀願されるも、私とて公用中の身、何ともならず、あの声に後ろ髪を引かれながら任地へ向かった。あの主人は助かっただろうか、気にはなるがどうにもならない。

戦争は、兵隊同士の生死をかけるだけではない。銃後の日本を守っていて下さる人々にも危害を加える。戦争には情けなどかけらも無い。人を見たら殺す。また、そのように自分たちも訓練されてきた。しかも日本は必ず最後に勝利を勝ち取るんだと肝に銘じられていた。

勝負の世界は勝たねば意味がない。しかし、戦争は人殺しだ。絶対にするものでは無い。今日こうして平和に過ごせるのも、幾多の同胞の犠牲によるところが大きい。

日本の建物を破壊するなら焼夷（しょうい）弾で十分あることを、アメリカはしっかり調べていた。広島、長崎の原爆で、まだ日本が降伏しなければ、九十九里浜から上陸していたとの情報も入っていた。もし、